蔵原惟人の芸術観の一考察

――「主題」を中心に――

蔡沐民

1927 年、コミンテルンによって採択された「二七年テーゼ」は「大衆に近づけというスローガン」を打ち出した。「二七年テーゼ」の影響を受けて、日本共産党にとって最も近接な課題は大衆に近づくことであるとされた。「大衆に近づけ」というスローガンが掲げられると、ソビエトから帰国した蔵原惟人は「無産階級芸術運動の新段階」(『前衛』1928・1) で「いかなる芸術を大衆の中に持ち込むかと云ふ」問題を出している。当時における芸術の討論は「前衛芸術家連盟」に拠った蔵原にとどまらず、「日本プロレタリア芸術連盟」の指導者である中野重治も芸術について自らの考えを発表した。そして、二人はいかなる芸術を大衆にもたらすべきかという問題をめぐって、いわゆる「芸術大衆化論争」を展開した。この論争は必ずしも具体的な問題を解決に導いたとは言えないものの、プロレタリア文学における芸術性の問題を提示したことになる。では、蔵原にとって、いかなる作品こそが「芸術」と呼ぶに相応しいものであったのだろうか。

蔵原は「芸術的方法についての感想」(『ナップ』1931・9) において、「題材」を取り上げて論じた。主題というものは、「「作者の観点から整理された題材」のことである」と指摘している。それにより、主題が題材と作者の観点という二つの概念を包含していることがわかった。それでは、それら三者がそれぞれ表す意味合いは何だろう。本発表では、「主題」に内包される二つの概念を明確に明らかにしたうえで、蔵原の芸術観の本質に迫ることを目的とする。

まず、「題材」について、蔵原が小林多喜二や徳永直、岩藤雪夫、鹿地亘の創作した作品に対する評論を考察した。「題材」とは、各作品がいかなる歴史的・社会的背景を出発点としているのかを意味しているものである。そして、「主題」と「作家の見方」について、「プロレタリア・レアリズムへの道」(『戦旗』1928・5) という評論を分析した。蔵原のいう「主題」に内包される「作家の見方」とは、作家が階級に対する明確な観点を有しているか否かを指しているものであり、それによって導き出される「主題」の本質は、「階級闘争」であると考えられる。

本稿は蔵原の芸術観における「主題」を明らかにしようとするものである。本発表では、「主題」という概念が「作者の見方」と「題材」に分けて捉えられると考えている。そのうち「題材」は作品の背景と関連し、「作者の見方」は作者の階級的観点と結びついている。最終的に、「題材」と「作者の見方」によって構成される「主題」の本質は、階級闘争にあると考えられる。